



22

世界文学全集

ジャン・クリストフ〈2〉

ロマン・ローラン／新庄嘉章訳

世界文学全集 22

ジャン・クリストフ II

ロマン・ローラン

訳者 新庄嘉章

発行／1971年6月30日 7刷／1977年8月15日

発行者／佐藤亮一 東京都新宿区矢来町71

発行所／株式会社・新潮社 東京都新宿区矢来町71

電話東京(03)266-5111 振替東京4-808 郵便番号162

印刷所／三晃印刷株式会社 製本所／新宿加藤製本所

本文用紙／三菱製紙株式会社

製函／文京紙器株式会社

函貼・扉・見返／特種製紙株式会社

表紙クロス／ダイニック工業株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします Printed in Japan 1971

目次

第四卷 反抗（続き）	5
第五卷 広場の市	110
第六卷 アントワネット	317
第七卷 家の中	421

Jean Christophe

by

Romain Rolland

ジャン・クリストフ

(Ⅱ)

第四卷 反 抗（続き）

3 解 放

彼は今や孤独だった。友だちは一人もいなくなってしまう。彼が逆境にある時にはいつも助けに来てくれていたあのなつかしいゴットフリート伯父^{おじ}、そして今のこの瞬間、せひいてほしいと思つたあの伯父は、数カ月前から旅に出ていた。そして今度は、永久に帰って来ないのだった。去年の夏のある晩、遠い村の所番地の書いてある、肉太の筆跡の手紙が届いて、ルイザに、兄の死んだことを知らしてきた。この小行商人は、健康をそこねていたにもかかわらず、相変わらず辛抱強く放浪の旅を続けていて、その途中で死んでしまったのだった。彼は死んだその村の墓地に葬られた。クリストフをささえてくれることができたかもわから

ない、この男らしくて穏やかな最後の友情は、深い淵に沈んでしまったのだ。彼は今は、彼の思想には無関心な年老いた母親と二人っきりになった。——母親は彼を愛するばかりで、理解することはできなかった。彼のまわりを取り囲んでいるものは、広漠としたドイツの平野、どんより暗い大洋だった。そこから出ようと努力すると、ますます深間^{ふかま}にはまった。彼の敵であるこの町は、彼がおぼれるのを見殺しにしていた……彼がもがき苦しんでいる時、闇の中に一筋の稲妻^{稲妻}がひらめいて、ハスラーの姿が浮かびあがった。子供のころ大好きだった大音楽家、今やその栄光が全ドイツの上に輝きわたっているあの音楽家の姿が。彼は昔ハスラーがしてくれた約束を思い出した。そこですぐに、この漂流物に必死の力をこめて取りすがった。ハスラーなら救ってくれるかもわからなかった。いや救ってくれるにちがいない！ 彼はハスラーになにを求めているのだろうか？ 助力でもなければ、金銭でもなければ、物質的な援助でもなかった。ただ理解してもらうことだけだった。かつてハスラーは彼と同じように迫害されていた。ハスラーは自由人だった。彼だったら、凡庸なドイツ人たちから恨まれ続け、押しつぶ

されようとしている一人の自由人を理解してくれるだろう。二人は同じたたかいたたかっているのだ。

こう考えると、彼はすぐさま実行に移った。母には一週間家をあげると断わった。そしてその日の晩に、ハスラーが音楽長をつとめている北ドイツの大都会に向かつて汽車に乗った。彼はもう待つことができなかった。それは呼吸するための最後の努力だった。

*

ハスラーは有名になっていた。彼の敵は武装を解いてはいなかった。だが、味方は、彼こそは過去、現在、未来を通じての最大の音楽家であると叫んでいた。彼は、いずれも同じように愚かな味方と敵に取り囲まれていた。彼は強い性格の人間ではなかったのだ。敵に対しては苛立ち、味方からは甘やかされていた。彼は全力を尽くして、自分を非難する者たちに対して不愉快なことをして、彼らをわめかせようとした。まるで、いたずらをして喜ぶ腕白者のようだった。このいたずらは、しばしばこのうえもなく悪趣味のものだった。単に、司教たちの頭の毛をぞっと逆立

たせるような風変わりな作曲に非凡な才能を用いるだけではなかった。また、異様な歌詞や、奇妙な主題や、いかがわしくきわどい場面や、つまり、一般の常識や礼儀にもとることができるようなすべてのものに対して、意地の悪い偏愛を示していた。市民階級の連中がわめきだすと、彼はうれしがっていた。それに、市民階級の連中は必ずわめきだすのだった。皇帝自身、横柄に思いつ上がった成り上がり者や貴族たちと一緒にあって、芸術のことに口を出し、ハスラーの名声を世間の恥だとして、機会あるごとに、彼の大胆な作品に対して、輕蔑的な冷淡さを示していた。こうしたやんごとなき人の反対は、ドイツ芸術の進歩的な党派にとつては、かえってその価値が認められたことをほとんど証明するものだったが、ハスラーは、それを憤りもし、また喜びもして、ますます無遠慮にやってのけていた。新しくなにか愚かしいことをしでかすたびに、友人連は有頂天になって、天才だと騒ぎたてた。

ハスラーの徒党は、特に、退廃派の文学者や、画家や、批評家から成っていた。彼らはたしかに、敬虔主義的精神と国家的道德心の反動的な復古——北ドイツにおいてはいささかその脅威があった——に対する反抗派

を代表する功績を持っていた。だが、彼らの独立心は、たたかっているうちに、滑稽なまでに興奮してしまつて、しかも彼らは自分でそれに気がつかなかった。というのは、彼らの多くは、かなり鋭い才能を持っていたが、知性が欠け、趣味はもっと欠けていたから。彼らはもはや、自分たちで作り上げた人工的な雰囲気から出られなくなった。そして、ついに、あらゆる芸術家の団体に見られるように、現実生活に対する感覚を全然失ってしまった。彼らは自分自身のために、また、彼らの雑誌を読み、彼らが好んで宣言するものをただ鵜のみにする馬鹿正直な人たちのために、掟を作っていた。彼らのおべっかは、ハスラーをあまりにもうぬぼれさせて、彼のためにならなかった。ハスラーは、頭に浮かぶあらゆる楽想を、無選択に取り上げた。そして、自分の実力以下のものを作っても、それでもなお、他の音楽家のものよりはすぐれていると、心ひそかに思いこんでいた。こうした考え方は、不幸にも、多くの場合あまりにもよく当たってはいたが、だからといって、この考え方が非常に健康なものであつて、りっぱな作品を作らせるに適したものであるということにはならなかった。ハスラーは、結局のところ、味

方であろうと、敵であろうと、すべての人を完全に軽蔑しきっていた。そしてこの辛辣で、嘲笑的な軽蔑は、自分自身と、人生全体にまでひろがり及んでいた。彼は昔は、多くの力強く素朴なものを信じていただけに、今ではかえつて、ますます皮肉な懷疑主義の中に沈んでいた。昔信じていたものを、年月のおもむろな破壊力から守る力もなく、また、もはや信じていないものを信じているように思いこむ偽善も持たないで、彼はそうした過去の思い出をちやかしてしまおうと夢中になっていた。彼は南ドイツの人間の性質を持っていた。無精で優柔不斷で、過去の幸福や不幸や、暑さや寒さにたえる力がなく、自分の平衡を保つためには、適度の氣候を必要としていた。彼は、知らず知らずのあいだに、のらくらして人生を享樂するようになってしまつていた。上等のごちそうや、濃い酒や、暇にまかせた散歩や、氣力のない考えなどを好んでいた。彼は天分に恵まれていて、時流に投じた縮まりのない音楽にもなお天才のひらめきを見せてはいたものの、彼の芸術には、先に述べたようなことが感じられていた。彼は、だれよりもよく、自分の力の失墜を感じていた。本当を言うと、それを感じているのは

彼一人だった。——もっともそれを感じるのには、まれな瞬間であつて、もちろん、彼はそうした瞬間をつとめて避けていた。いったんそれを感じると、人間ぎらいになつて、暗い気分に沈み、利己主義的な懸念や健康の心配に心を奪われた。——昔、彼の狂熱や憎悪をかきたてたことに対しては、それがどんなことであらうと、まるで無関心だった。

*

こんな人の所へ、ジャン・クリストフは慰めを求めに來たのだった。雨もよいの冷たい朝、彼の目には、芸術における独立的精神の象徴とも見える人の住んでいるこの都会に、なんとという希望をいだいて到着したことだろう！ 彼はこの人から、友情と勇氣に満ちた言葉を期待していた。無益ではあるが必然的なたたかいを続けるためには、彼はそれを必要としていた。あらゆる真の芸術家は、息の根の続く限り、ただの一日として武装を解かずに、そうしたたたかいを世間相手にまじえねばならない。なぜなら、シラーも言つた通り、《公衆との、決して悔いのないただ一つの關係——

それはたたかいである。》

クリストフは非常に気がせいいていたので、駅の近くの、最初に目についたホテルに荷物を預けるや、さっそく劇場にかけつけて、ハスラーの住所をきいた。ハスラーは、市の中央からかなり遠い、郊外に住んでいた。クリストフは小さなパンをかじりながら、電車に乗った。目的地に着くにつれて、心臓がどきどきした。

ハスラーが住いを選んだ区域には、新しい異様な様式の家が立ち並んでいた。それは、若いドイツが博學をむやみやたらに注ぎこんで、天才ぶりを發揮しようと全力を傾けつくしているものだった。真っ直ぐでなんの趣もない道路の、ごく平凡な町の真ん中に、いきなりいろんな建物が立っていた。エジプトの大墓窟。ノルウエーの農家。修道院。城塞。万国博覽会の亭。生氣のない顔に大きな片目があき、地面にもぐりこんで、腹のふくれ上がったいぎりのような家。牢獄の鉄格子。潜水艦のおしつぶされた扉。鉄の輪。窓の鉄格子の中にある金色の暗号文字。表門の上にある、なにかを吐き出しているような顔つきの怪物。あちらこちら、思いがけない所に敷いてある青い瀬戸の床石。アダムとイブを現わしている雑色の切嵌細工。いろん

な不調和な色の瓦でふかれた屋根。一ばん上の階には銃眼、頂上には異様な形の動物の像があり、一方には窓一つないが、突然、片方に、正方形や矩形の穴が、ばかりと傷口のように、並んであいている要塞式の大きな家。裸壁の大きな面、そこから、いきなり、——ニーベルンゲン式の人像柱にささえられて——ただ一つの窓に大きな露台が突き出ている。その石造の欄干から、ベックリンの描いた人魚のような、鬚のある、髪ひげのふさふさした老人のどがった頭が二つ飛び出していた。こうした牢獄のような建物の一つ——それは古代エジプトの王宮のような家で、入り口に裸体の巨人像が二つある、二階建の軒の低い家だった——の破風に、建築家が次のようにしるしていた。

芸術家よ、おのが宇宙を示せ、
過去にもなく、将来にもなきその宇宙を！

クリストフはハスラーのことばかり考えていたので、びっくりした目で見ていただけで、全然理解しようとはしなかった。彼は捜している家にとどろついた。——それはシャルマーニュ王朝式のごく簡素な家

だった。内部は、金のかかった陳腐な贅ぜいがこらしてあった。階段には熱すぎた暖房器の暑苦しい空気がよどんでいた。狭いエレベーターがあったが、訪問の心がまえをする余裕がはしかつたので、それは利用しなかった。そして、感動のために胸をどきどきさせ、足をよろめかせながら、小刻みな足取りで五階までのぼって行った。こののぼるわずかな時間のあいだに、昔ハスラーと会った時のことや、幼な心の感激や、祖父の面影などが、まるできのうのことのように思い出されてきた。

彼が入り口の呼鈴を押した時は、十一時近かった。応対に出たのは、いかにも家政婦のような態度の、はきはきした小間使いで、ぶしつけに彼の顔をじろじろと見た。そしてまず、「旦那様はお疲れですから、お目にかかれません」と言った。それから、クリストフの顔に率直な落胆の表情の浮かんだのに、どうも興味をそそられたらしい。というのは、無遠慮に彼の全身を見まわしたのち、突然態度を和らげ、クリストフをハスラーの書斎に通して、旦那様に会えるようにして差し上げようと言ったからだ。それから、彼の方たちらっと流し目をくれてから、扉を閉めた。

壁には、印象派の画や、フランスの十八世紀の粋な版画がいく枚か掛かっていた。ハスラーはあらゆる芸術に精通していると自負していたのである。そして、取り巻きの連中から与えられた指示に従って、マネとワトールとを、自分の趣味の中で結びつけていた。これと同じような様式の混合が、家具の飾りつけにも現われていた。ルイ十五世式の実に立派な机が、近代芸術様式の眩掛椅子数脚と、多彩なクッションを山と積んだ東洋式の長椅子一脚とに取り巻かれていた。どの扉にも鏡がついていた。日本の骨董品が、棚や暖炉の上に、所狭いまでに置かれてあった。そしてその暖炉の上には、ハスラーの胸像がいばり返っていた。円テーブルの上の盤の中には、警句や賛辞の書きこんである、女歌手や、女性ファンや、友人などの写真がたくさんに並べられてあった。机の上は物すごく散らかっていた。ピアノは蓋がaitamamaddatta。棚の上は埃にまみれていた。吸いさしの葉巻がすみずみに捨てられてあった……

隣の部屋で、不機嫌な声がなにやらぶつぶつ言っているのが、クリストフの耳に聞こえた。小間使いのきっぱりした調子の言葉が口答えしていた。ハスラーが

姿を見せるのを渋っていることは明瞭だった。また、小間使いがなんとかしてハスラーを出そうと骨折っていることも明瞭だった。彼女は遠慮なく、極端になれなれしい調子で答えていた。その鋭い声は、壁を通して聞こえてきた。彼女が主人に注意しているのを聞いていると、クリストフは気持ちが落ちつかなかった。だが、主人のハスラーはそれをいっこう気にしていなかった。それどころか、そうした無礼な言葉をおもしろがっているようだった。そして、相変わらずぶつぶつ言いながらも、小間使いをからかい、相手を興奮させて楽しんでいた。やっとクリストフは、扉の開く音を耳にした。それから相変わらず不平をこぼしたり、からかったりしながら、ハスラーが足を引きずって出てくる物音が聞こえてきた。

彼がはいって来た。クリストフはぐっと胸を締めつけられた。たしかに見覚えがあった。むしろ見覚えのない方がよかった！ たしかにそれは彼だった。だが、もはや昔の彼ではなかった。皺一つない大きな額、子供の顔のようなつるりとした顔は昔のままだった。だが、頭は禿げ、からだはでっぷりとふとり、顔色は黄色で、眠そうな格好をしていた。下唇は少し

るみ、退屈そうな、むっとした口つきをしていた。肩をすばめ、形のくずれた上着のポケットに両手をつっこみ、足には古靴を引きずっていた。ボタンも全部かけてないズボンの上に、シャツがたくれていた。彼は眠そうな目でクリストフの顔を見た。クリストフが自分の名前を口ごもりながら言っても、その目は輝かなかった。彼はなにも言わずに、機械的に挨拶を返し、頭でクリストフに席を示し、ため息をつきながら、長椅子の上にとっと腰をおろした。そしてクッションをいくつも自分のまわりに重ねた。クリストフは繰り返した。

「前に一度……ご親切にも……私はクリストフ・クラフトです……」

ハスラーは、長椅子にからだを埋め、長い足を組み合わせ、額のあたりにまであがった右膝の上に、やせた両手を組んでいた。彼は答えた。

「覚えてないね」

クリストフは喉をひきつらせながら、昔会ったことを思い出させようと努力した。どんな時でも、そうしたなつかしい思い出を語るのには、彼にとってはむづかしいことだった。特に今の場合は、たえがたい苦痛だ

った。文句がもつれ、言葉が見つからず、とてつもないことを言っては、顔をあからめた。ハスラーは相変わらず、ぼんやりした無関心な目で彼をじっと見やりながら、彼がまごつくのをそのままにしていた。クリストフがやっと話しおいても、ハスラーは、しばらく黙ったまま、やはり膝をゆすっていた。クリストフが話し続けるのを待っているかのように。それから言った。

「そう……だからと言って、われわれはもう一度若くはなれないね……」

そう言って彼は伸びをした。

「……これは失礼……眠らなかつたもので……昨夜はねたのち劇場で宴会があつて……」

そう言ってまたあくびをした。

クリストフは、自分が今話したことに、ハスラーがなにか一言言ってくれることを期待していた。だが、こうした話には全然興味のないハスラーは、なにも言わなかった。そして、クリストフの生活についてもなにつきかなかった。あくびをしおえると、彼はきいた。

「もう長くベルリンにいるのかね？」

「今朝着いたばかりです」とクリストフは答えた。

「そう」と、ハスラーは別に驚いた様子もなく言った。「ホテルはどこだね？」

その返事を聞く様子もなく、彼はいかにも大儀そうにからだを起こし、呼鈴のボタンに手をのばして、それをならした。

「ちょっと失礼」と彼は言った。

小間使いが、例の横柄な顔つきで現われた。

「キティ」と彼は言った。「きょうは朝飯を食わせないつもりかい？」

「でも」と彼女は言った。「お客さまのいらっしゃるのに、ここにお食事を持ってくるわけにはいきませんわ」

「どうしていけないんだね？」と彼は、馬鹿にしたようなまばたきでクリストフを示しながら言った。「この方はわしの精神に糧を与えて下さる。わしはからだに糧を与えるんだ」

「人様の前で召し上がるなんて、恥ずかしいとお思ひになりませんか？　まるで動物園の獣みたいですよ」

ハスラーは、怒るところか、笑いだした。そして訂正した。

「まるで家の中の犬猫みたいにね」

「とにかく、いいから持っておいで」と彼は続けて言った。「その恥ずかしさとやらも、一緒にたべちまうよ」小間使いは肩をすくめて、出て行った。

クリストフは、ハスラーが依然として、自分の仕事のことをなにもたずねてくれようとしないので、途中で切れていた話を再び続けようとつとめた。田舎の生活のむづかしいこと、人々の凡庸なこと、彼らの気持ちの偏狭なこと、自分の孤独なことなどを話した。自分の精神的な苦悩に相手の関心を引こうと努力した。

だが、ハスラーは、長椅子にからだを埋めて、クッションに頭をもたせかけ、目を半ばとじて、彼を勝手にしゃべらせておいた。別に耳を傾けてもいないようだった。あるいは、時にちよっと、瞼をあげて、田舎の人々に関する冷たい皮肉や、おどけた警句を投げかけて、もっと打ちとけて話そうとするクリストフの気持ちを引きなり挫いてしまった。——キティが朝食の盆を持ってきた。盆の上には、コーヒー、バター、ハムなどがのっていた。彼女は、ふくれた面をして、机の上の紙が乱雑に散らかっている真ん中にそれを置いた。クリストフは、苦しい話を続けるために、

彼女が出て行くのを待った。話を続けるのは、それほど骨が折れた。

ハスラーは、盆を自分の方に引き寄せていた。コーヒーをついで、それに唇をつけた。それから、なれなれしい、人の好きそうな、だがちよつと相手を見下したような調子で、クリストフの話をさえぎりながら、「一杯いかが？」とすすめた。

クリストフは辞退した。彼は中断された話の糸をつなぐのに一所懸命だった。だが、ますますまごついてしまつて、もはや自分でなにを言っているのかわからなかった。彼はハスラーの格好に氣を取られていた。

ハスラーは頤の下に皿さしを持ってきて、バタのついたパンや、ハムのきれを、指でつまんで、子供のようにな、むやみに頬ほばっていた。でも、クリストフは、やつとこのことで、作曲していることや、ヘッベルの『ユーディット』のための序曲を作ったことを話すことができた。ハスラーは上の空で聞いていた。

「なにをだつて？」と彼はきいた。

クリストフは題名を繰り返した。

「ああ！ そう、そう！」とハスラーは言つて、パンのきれと指とを茶碗の中につけた。

そしてそれきりだった。

クリストフは、がっかりして、立ち上がつて帰ろうとした。だが、それではこうして遠い所からやつてきたことがむだになると思つた。そこで、勇氣をふるい起こして、口ごもりながら、自分の作を少し弾ひかしてくれと頼んだ。そう言いかけると、ハスラーはさつそく彼をさえぎつた。

「いや、いや、わたしにはわからないよ」と、からかうような、それにちよつとひとを馬鹿にしたような、皮肉な調子で言つた。「それに、ひまもないしね」

それを聞いて、クリストフは目に涙を浮かべた。だが彼は、自分の作曲についてハスラーからなにか意見を聞かないうちは、決してここから出まいと心に誓っていた。当惑と怒りのまじつた気持ちで彼は言つた。

「おゆるし下さい。でもあなたは、昔、私の作品を聞いてやると約束して下さいました。私はただそのために、ドイツの奥地からやつてきたのです。ぜひ聞いて下さい」

こうした相手の態度に慣れていないハスラーは、不器用な青年が顔を真っ赤にして怒り、今にも泣き出さなばかりにしているのを、じつと見つめた。彼は興味

をそそられた。そこで、ものうげに肩をすくめ、ピアノを指さして、仕方がないといったおどけた表情で言った。

「じゃ……弾いてごらん！……」

そこで、彼は、昼寝でもしようとする人のように、長椅子にからだを埋め、クッションを拳固でたたいて平らにならし、その上に伸ばした両腕を置いて、半ば目を閉じた。それからちょっと目をあけて、クリストフがポケットから出した楽譜の厚さをはかり、ほんと小さなため息を一つついて、退屈だが聞く覚悟をきめた。

クリストフは気おくれにおびえ、また腹立たしい気持ちもしたが、弾きはじめた。すると間もなく、ハスラーは、目を見開き、耳をそばだてた。美しいものにはわれ知らず心をとらえられる芸術家の職業的な興味がわいてきたのだった。最初はなにも言わなかった。そしてじっとしていた。だが、その目がだんだんはつきりしてき、むっつりした唇が動いてきた。それから、完全に目をさまし、驚きと賛成の呻きを漏らした。それは言葉にならない、ぼんやりした感嘆詞だった。だが、その調子は彼の考えていることをはつきり

現わしていた。そこでクリストフはなんとも言えない幸福を覚えた。ハスラーはもはや、弾かれたページと、残っているページとを見くらべようとはしなかった。クリストフが一曲弾き終わると、彼は言った。

「そのつぎ！……そのつぎ！……」

彼は人間らしい言葉を使いはじめた。

「いい！こいつはいい！……（彼は感嘆していた）すばらしい！……恐ろしくすばらしい！……だが、なんてこった！（彼はびっくりしてどもっていた）いたい、これはなんだ？」

彼は椅子の上からだを起こして、頭を前に突き出し、手を耳にかざし、ひとりごとを言い、満足そうな笑いを浮かべていた。そして、ある珍しい和音のところに来ると、唇をなめるように、ちょっと舌を出した。思いがけない転調に、彼は非常に強い印象を受けて、感嘆の声を漏らしながら、いきなり立ち上がった。そして、ピアノのそばに来て、クリストフの横にすわった。クリストフがそこにいることも気づかないようなふうだった。彼の頭には音楽のことしかなかった。そして曲が終わると、彼は楽譜を手に取り、今の曲の譜を読み返しはじめた。それからつぎのページへ